

令和 2 年 5 月 30 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02213

研究課題名(和文) 註釈家スティラマティと法相教学の安慧とヴァラビーの堅慧の関係性の総合的解明

研究課題名(英文) A Comprehensive Elucidation of the Relationship between the Commentator Sthiramati, Anhui of Faxiang Doctrine, and Jianhui of Valabhi

研究代表者

佐久間 秀範 (Sakuma, Hidenori)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：90225839

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：玄奘の『大唐西域記』ヴァラビーの項にある「堅慧」を註釈家スティラマティおよび中国唯識教学・日本法相教学の安慧と混同したいきさつを辿り、この三者が別人であることを解明した。誤解の発端は玄奘の弟子窺基が玄奘の漢訳「堅慧」を「安慧」と言い換え、しかも註釈家スティラマティと結びつけてしまうのに十分な情報を盛り込んだことにある。現代の仏教史を描くに当たって、日本の江戸時代の研究で華嚴教学系統の「堅慧」とこの「安慧」とを混同し、ヨーロッパ仏教学にも影響し、三者が同一人物とされることになったことを突き止めることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来仏教史の中で瑜伽行唯識思想の歴史的成立過程などが玄奘の『大唐西域記』など中国の報告書や中国唯識教学・日本法相教学の伝える伝承によって描写されてきた。しかし、新たなサンスクリット語写本の発見も手伝い、再度サンスクリット語原典を注意深く吟味する中で、これまでの考え方が通用しなくなってきていた。本研究ではその中から安慧を取り上げた。従来、註釈家スティラマティとヴァラビーのスティラマティ、その漢訳「堅慧」「安慧」が同一人物とされてきたが、原典を吟味した結果、それぞれ別人であることを解明した。従来仏教史を根本から書き直す証拠を提示した。

研究成果の概要(英文)：We traced the circumstances whereby Jianhui 堅慧 mentioned in the section on Valabhi; in the Da Tang xiyuji 大唐西域記 by Xuanzang 玄奘 came to be confused with the commentator Sthiramati and with Anhui 安慧 known in Chinese Faxiang 法相 (Vijnanavada) doctrine and Japanese Hosso 法相 doctrine, and we ascertained that these were three separate individuals. The origin of the above misunderstanding lay in the fact that Xuanzang's disciple Kuiji 窺基 changed the Chinese equivalent "Jianhui" used by Xuanzang to "Anhui" and, moreover, provided sufficient information to link him to the commentator Sthiramati. We were able to determine that in research conducted in Japan during the Edo period this Anhui was confused with the Jianhui known in Kegon (Huayan) 華嚴 doctrine, which then also had an influence on Buddhist studies in Europe, and consequently in histories of Buddhism written in the modern period these three figures came to be regarded as one and the same person.

研究分野：瑜伽行唯識思想

キーワード：スティラマティ 安慧 堅慧 中国唯識教学 日本法相教学

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

平川彰 1979『インド仏教史』下巻 pp.228-250 で述べられている安慧の情報がこれまでの仏教史の常識であった。ところが唯識理論の歴史的推移からすると『中辺分別論』『唯識三十頌』のスティラマティの註釈書に見られる内容が、チベット語訳のみに残る『大乘莊嚴經論』のスティラマティの註釈書に見られる内容と大きく異なっていることを代表者は見出した。前者が玄奘より以前であるのに対して後者は玄奘と同時代かそれ以降でなければ知り得ない理論内容をもっていることが根拠であった。そこで基盤研究 B「スティラマティ(安慧・堅慧)の思想の総合的研究」(平成 25 年度～平成 28 年度)を獲得し、「註釈家スティラマティは一人か?」として学会発表と論文発表を端緒に、当テーマに関心を寄せる研究者達と共同研究をおこなった。

その結果近年スティラマティに帰される諸文献の梵文写本の発見により『中辺分別論』『唯識三十頌』の註釈書だけでなく『五蘊論』『俱舍論』の註釈書の用語法を含め様々な観点から同一人物の著作である可能性が高いのに対し、上記『大乘莊嚴經論』の註釈書が後代であることが国内外のスティラマティ研究者の認知するところとなった。

すると従来のヴァラビーのスティラマティが法相教学の安慧と同一人物で、しかも世親(Vasubandhu)の著作に註釈を書いたという学説はどこから興り、どのように継承されたかをまずは検証する必要が出てきた。

本研究は当学説の起源が、『大唐西域記』の伐臘毘国(=ヴァラビー)に玄奘が記した「堅慧」を Sthiramati として欧州の研究者達が定着させたことにあると睨み、そこから吟味検証を始めることにした。『大唐西域記』は Stanislas Julien が 1857-58 年に初めて仏訳し、次いでインド・グジャラート州ヴァラビー出土の銅板碑文に Sthiramati の名があり寺院を建立したとあったことから、これを見た Bühler は 1877 年発行の The Indian Antiquary, vol. VI, pp9-10 で”The Sthiramati mentioned in our grants and by Hiwen Thsang is, no doubt, the famous pupil of Vasubandhu, who composed commentaries on the writings of his master”と述べた。1884 年発行の Samuel Beal 『大唐西域記』英訳 vol.2,p.268 でははっきりと「堅慧」を Sthiramati と訳し、註 76 を付して Vasubandhu (世親)の著作に多くの註釈を書いた人物と書いている。その註に南條文雄の名がある。南條は当時オックスフォード大学など欧州にいたことが判っている。つまり欧州では、玄奘がわざわざ「安慧」ではなく「堅慧」と記した人物を、法相教学で正当説を唱える論師「護法」と最も対立する「安慧」と同一人物とし、ヴァラビーには徳慧とともにいた人物に違いないと決定づけた。これによって註釈家スティラマティと法相教学の安慧とヴァラビーの堅慧が同一人物であることが揺るぎないものとなった。そこで『大唐西域記』を受け継ぐ『慈恩伝』などの玄奘の他の紀行文のヴァラビーの箇所は何故玄奘がその名すら記さなかったのかを検証する必要がある。

チベットの伝承「Blo brtan」も中国の伝承「安慧」もナーランダーの学匠としては共通している。ならば玄奘がヴァラビーの箇所に「安慧」ではなく「堅慧」と記したのには理由があるはずである。これを[1]として検証する。

唯識中観の諸論師の相互引用、相互批判が安慧の『大乘中観釈論』、清弁の『般若灯論釈』と観誓の疏、および護法の『大乘広百論釈論』に見られることなどを根拠に安慧、清弁、護法の年代が設定された。護法の著作はすべて漢訳のみである。しかも唯識教学の現在の研究成果から、護法が早世し一歳年上の戒賢が継いだ伝承など、彼の伝記は信憑性が疑わしい。チベット語訳と対比すると漢訳『般若灯論釈』には誤訳が多い。その副註釈である観誓のチベット語訳に「Blo brtan」とあり、これが「安慧」であるとして議論が進んだ。『大乘中観釈論』は宋代の訳で、羅什訳や玄奘訳にない漢文解釈が必要な上、インド・チベットの中観派の思想との対比および唯識教学・法相教学との対比をしながら内容の解析をする必要であることが先の基盤研究 B の中で

明らかになった。そこで本研究では中観派と両教学を専門とするチームで解説を進める。また梵文の回収できる『中辺分別論』『唯識三十頌』『五經論』『俱舍論』のスティラマティ積は内容の類似、文章の類似など様々な観点からほぼ同一人物であると見なされることが優勢になっている。一方、チベット語訳者が十分に原文を理解できなかったと自白する『大乘莊嚴經論』スティラマティ積には、玄奘訳『仏地經論』以降にしか見られない両教学の「八識と四智の結合関係」「五性各別」がはっきりと見られることから、先のスティラマティとは別人と考えられる。その上で[2]として『大乘中観釈論』の安慧と上記両スティラマティとの思想内容の相互関係を吟味検証する。

唯識教学・法相教学の研究は現在かなりの進歩を遂げ、「安難陳護一三三四」「五性各別」とどまらず、以前とは比較にならない程の研究成果がもたらされている。真諦が安慧を継承するという伝承に信憑性がないことも、伝承の起源に遡ってかなりはっきりしている。こうした成果をもって、[3]として唯識教学・法相教学の伝える「安慧」像がどのようにしてできあがったかを吟味検証し、註釈家スティラマティと安慧を比較検討する。

2. 研究の目的

上記のような学界での瑜伽行唯識思想史の常識のなかで、特に瑜伽行唯識思想を扱うインドのサンスクリット語原典や銅板碑文などインスクリプションおよびそれ以外の資料を注意深く見直すことで、従来の考え方で書かれた仏教史の中の瑜伽行唯識思想の歴史を根本から吟味検証する。その検証結果に基づいて上記の三つのポイントを中心に考察して行く。[1]玄奘自身が『大唐西域記』のなかでヴァラビーの銅板碑文に登場する Sthiramati を安慧と漢訳せずに、わざわざ堅慧と漢訳したのは何故かの理由を究明し、玄奘自身はヴァラビーに登場する Sthiramati がナーランダーで活躍し玄奘の弟子窺基が安慧として『大乘阿毘達磨雜集論』の編者と記録した人物とは別人であると見做していた可能性が高いと考えられること、[2]梵文校訂諸テキストの内容と用語法などから瑜伽行唯識思想を扱う論書に註釈を書いた註釈家 Sthiramati と『大乘莊嚴經論』に註釈を書いた註釈家スティラマティが別人の可能性が高いこと、[3]インド文献に遡れない法相教学の伝える安難陳護一三三四などの説がどのように造り上げられたかを究明して行く。さらに余裕があれば、現在の仏教史の中では真諦 (Paramārtha) がヴァラビーの安慧 (Sthiramati) を継ぐ人物との伝説がいつ頃どこでどのように創り上げられたかも含めて、総合的に検証し解明することを研究の目的とした。

3. 研究の方法

上記の三つの考察を進めるに当たって、以下のような方法を用いた。

[1] 欧州の研究者は、玄奘が「安慧」ではなく「堅慧」と『大唐西域記』のヴァラビーの箇所記録した意図に顧慮したのかを吟味する。彼らへの法相教学の影響についても検証する。ヴァラビー出土の銅板碑文に関する研究は塚本啓祥や Njammasch の研究に至るまで現地調査をせずに、過去の報告を鵜呑みにして継承した研究に他ならないか否かを吟味する。チベットの『ターラナータ仏教史』などの伝承も加え、玄奘の報告を唯識教学・法相教学の研究成果を踏まえた上で、考古学や美術史などの資料を加えると、ナーランダーと並び称される僧院がヴァラビーに存在した可能性が低いことがわかる。そこで『大唐西域記』などの報告が、玄奘が現地を訪れたことによるのか、他からの情報のみに基づくのかを検証する。その上で銅板碑文にある Sthiramati という僧の存在を玄奘が知った上で、あえて「安慧」ではなく「堅慧」としたことの意図を解明する。

[2] 転依思想 (四智と八識の結合関係)、五性各別にとどまらず、これまでの研究で『中辺分別

論』『唯識三十頌』『五蘊論』『俱舍論』の註釈書に見出される思想の歴史的な位置づけが『大乘莊嚴經論』の註釈書のものより古いことは指摘できるのだが、さらに多くの情報を集める。これを継続し、さらに『大乘中觀釈論』の解説を進め、清弁、護法、陳那などとの相互関係を再吟味し、時代的に開きがある上記両註釈家との関係を、かなりの精度で明確にする。

[3]唯識教学・法相教学の研究者が現在到達した結果を、中国哲学や、中国ないし日本の社会情勢や思想の歴史的な分析に照らして、唯識教学・法相教学の伝承する「安慧」をインド仏教の思想史の中で吟味し、個々の伝承等の信憑性を一つ一つ検証する。

4. 研究成果

本研究で目指した上記三つについて、ほぼすべてに亘って研究成果を出すことができたのに加え、余裕があればとしたヴァラビーの安慧を継承するのが真諦であるとする伝承が、日本の江戸時代の華嚴教学系統の堅慧と玄奘の堅慧とを混同したことに起因する可能性が極めて高いという結果にもたどり着くことができた。その成果は最終的に‘Was There Really Only One Commentator Named Sthiramati?’, in 『哲学・思想論集』第45号(*Studiens in Philosophy No.45*) (筑波大学 哲学・思想専攻) 筑波、2020,3, pp.39-61.と‘Was Sthiramati of Valabhī the Same Person as the Commentator Sthiramati?’, in *Samhāṣā* (Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism) 36, 2020), pp.91-108.において公にした。全体像は以下の通りである。

[1] 特に Bühler をはじめとする欧州の研究者は、玄奘が「安慧」ではなく「堅慧」と『大唐西域記』のヴァラビーの箇所記録した意図を十分に顧慮したとは言えず、そのためにヴァラビーの Sthiramati が註釈家スティラマティおよび中国唯識教学・日本法相教学の安慧と同一人物であると信じ込んで仏教史を創り上げたことが明確になった。

ヴァラビー出土の銅板碑文に関する研究についても Bühler 以降、塚本啓祥や Njammasch の研究に至るまで現地調査を十分にせず、過去の報告を継承した研究に他ならない。代表者は西インドの現ヴァラビーの現地調査に加え、同じく銅板碑文が多く出土している東インドのオリッサ地方やアマラバティーなどの現地調査を行い、考古学や美術史などの報告とも見比べることで、玄奘の『大唐西域記』における西インドの報告についての信頼性に疑問な点が多く、そのまま記録を鵜呑みにして仏教史に反映させるべきでないことを強く感じ取った。チベットの『ターラナータ仏教史』などの伝承も加え、玄奘の報告を唯識教学・法相教学の研究成果を踏まえた上で、重ねて考古学や美術史などの資料を加えると、ナーランダと並び称される僧院がヴァラビーに存在した可能性が低いことがわかる。このような研究結果に基づくと『大唐西域記』などのヴァラビーに関する報告があるからと言って、玄奘が実際に現地を訪れたという可能性が低いと思われ、逆に玄奘以前の記録や玄奘が収集した他からの情報に基づいて『大唐西域記』西インド部分を記述した可能性が高いことが判った。その上で銅板碑文にある Sthiramati という僧の存在を玄奘が知った上で、ヴァラビーの部分にあえて「安慧」と漢訳せず「堅慧」と漢訳した意図を感じる。しかしその後玄奘の弟子窺基は玄奘が「堅慧」と漢訳した人物を、わざわざ「安慧」と漢訳し直し、加えて玄奘が一切語らなかった人物像を加えたことも判った。これが原因となって、その後の中国唯識教学・日本法相教学における安慧像が描かれ、しかもヴァラビーの安慧と同一人物であるという常識ができあがってしまったことが明確になった。

[2]転依思想（四智と八識の結合関係）、五性各別にとどまらず、これまでの研究で『中辺分別論』『唯識三十頌』『五蘊論』『俱舍論』の註釈書に見出される思想の歴史的な位置づけが『大乘莊嚴經論』の註釈書のものより古いことは指摘できるのだが、さらに多くの情報を集める。これを継続し、さらに『大乘中觀釈論』の解説を進め、清弁、護法、陳那などとの相互関係を再吟味

し、時代的に開きがある上記両註釈家との関係を、かなりの精度で明確にはなってきたものの、さらに文献内容の吟味を続け、より精度を高める必要性が浮き彫りになった。

[3]唯識教学・法相教学の研究者が現在到達した結果を、中国哲学や、中国ないし日本の社会情勢や思想の歴史的分析に照らして、唯識教学・法相教学の伝承する「安慧」をインド仏教の思想史の中で吟味するなかで、先にも述べたように、ヴァラビーのスティラマティが註釈家スティラマティと同一人物であることは **Bühler** にはじめる銅板碑文の解釈によることは示したとおりである。

余裕があればとした考察に中国唯識教学に先行する撰論宗の思想を基礎づけることになった『撰大乘論』の翻訳者真諦がヴァラビーのスティラマティの漢訳安慧の思想を継承したとする伝承の出所は、次のように推測されることが判った。

江戸時代の普寂が『顕揚正法復古集』の中に「馬鳴・堅慧二大士則説如来蔵」（大日本仏教全書 29、177c）と記していることから普寂が「堅慧」を『宝性論』の著者として如来蔵の思想家に位置づけたということは、浄土宗の普寂が華嚴教学の系統を継いでいることを示している。日本では、華嚴宗の「堅慧」と法相宗の「安慧」とが区別されずに、あるいは混同して、新たな展開を見せたと考えられる。つまり「安慧」は如来蔵思想をもち、**Valabhī** で活躍した人物と解釈され、真諦訳『撰大乘論』が多分に中国的如来蔵思想に傾斜した解釈を持つことによって、玄奘以前の唯識解釈の基礎を築いた人物である真諦は「あのヴァラビーの安慧」を継承したに違いないとの評価が芽生え、その後明治時代に西欧からの仏教学が輸入されるにいたって、ヨーロッパに留学した日本人研究者によってヨーロッパ仏教学にもその影響がもたらされ、その後の仏教学としてもヴァラビーのスティラマティ、註釈家スティラマティ、中国唯識教学・日本法相教学の安慧が同一人物であることが確信され、さらにヴァラビーの安慧を真諦が継承したという伝承が定着してしまったと見なすことが可能である。こうした歴史的経緯の中で複数のスティラマティが同一人物として混同されたことがかなり明確になったことが、本研究の成果である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 佐久間秀範	4. 巻 36
2. 論文標題 Was Sthiramati of Valabhi the Same Person as the Commentator Sthiramati?	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Sambhasa	6. 最初と最後の頁 91-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 佐久間秀範	4. 巻 45
2. 論文標題 Was There Really Only One Commentator Named Sthiramati?	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 哲学・思想論集	6. 最初と最後の頁 39-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 佐久間秀範	4. 巻 6
2. 論文標題 唯識文献所呈現出的兩種傾向	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 唯識研究	6. 最初と最後の頁 287-295
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 佐久間秀範	4. 巻 67 - 2
2. 論文標題 ヴァラビーの堅慧	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 914-922
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉村誠	4. 巻 67-2
2. 論文標題 玄奘初伝の部派仏教 - 『異部宗輪論』を中心に -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 729-736
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 齋藤明	4. 巻 1
2. 論文標題 Avalokitesvara and Brahma 's Entreaty	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Bulletin of the International Institute for Buddhist Studies	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤明	4. 巻 42
2. 論文標題 シャーンティデーヴァの<廻向>論 新旧『入菩薩行論』最終章を中心として (2)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 成田山仏教研究所紀要	6. 最初と最後の頁 63-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤明	4. 巻 36
2. 論文標題 『般若心経』とアヴァローキテーシュヴァラ (観自在)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋の思想と宗教	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋川智昭	4. 巻 47
2. 論文標題 唯識系譜考	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 豊山教学大会紀要	6. 最初と最後の頁 47-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉村誠	4. 巻 48
2. 論文標題 中国の文献に見られる瑜伽行派と中観派の論争	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 駒澤大学仏教学部論集	6. 最初と最後の頁 191-212
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉村誠	4. 巻 82
2. 論文標題 中国唯識学派の人間観 『成唯識論』のアーラヤ識説を中心に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本仏教学会年報	6. 最初と最後の頁 169-185
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉村誠	4. 巻 66-2
2. 論文標題 『般若波羅蜜多心経幽贊』における「空」の解釈について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 55-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 斎藤明	4. 巻 41
2. 論文標題 シャーンティデーヴァの<廻向>論 新旧『入菩薩行論』最終章を中心として (2)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 成田山仏教研究所紀要	6. 最初と最後の頁 57-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計23件 (うち招待講演 8件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 Sakuma Hidenori
2. 発表標題 Was Sthiramati of Valabhi the Same Person as the Commentator Sthiramati?
3. 学会等名 The 17th World Sanskrit Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐久間秀範
2. 発表標題 ヴァラビーの堅慧
3. 学会等名 日本印度学仏教学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sakuma Hidenori
2. 発表標題 Some Doubts about the Transmission of the Yogacara Masters in the Chinese Vijnanavada (Weishi) and Japanese Hosso School
3. 学会等名 東方唯識学会 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐久間秀範
2. 発表標題 从修行者の視角解唯識思想
3. 学会等名 峨眉山仏学院招待講演（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoshimizu Chizuko
2. 発表標題 Revisiting the Tenth Chapter of the Samdhinirmocanasutra: A Scripture on Rational Reflection
3. 学会等名 International Conference: Evolution of Scriptures, Formation of Canons (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoshimizu Chizuko
2. 発表標題 Updating Prasangika in Kashmir and Tibet
3. 学会等名 Austrian Academy of Sciences, Institute for the Cultural and Intellectual History of Asia (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉村誠
2. 発表標題 玄奘所伝の部派仏教
3. 学会等名 日本印度学仏教学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 齋藤明
2. 発表標題 『宝性論』のtathagatagarbha（如来蔵）解釈考
3. 学会等名 国際東方学会議
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐久間秀範
2. 発表標題 唯識文献に見られる二つの傾向
3. 学会等名 第15回吳越仏教学術検討会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐久間秀範
2. 発表標題 修行者の視点から唯識思想を読み解く
3. 学会等名 浙江大学仏教資源及び研究センター特別講演（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Sakuma, Hidenori
2. 発表標題 Buddhism and Buddhology
3. 学会等名 Seminar at Gadjah Mada University（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sakuma, Hidenori
2. 発表標題 Buddhism in Japan
3. 学会等名 Seminar at Gadjah Mada University (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉村誠
2. 発表標題 『般若波羅蜜多心經幽贊』における「空」の解釈について
3. 学会等名 日本印度学仏教学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 吉村誠
2. 発表標題 玄奘の一點 唐初期における言尽不尽意論争
3. 学会等名 仏教史学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 吉水千鶴子
2. 発表標題 チベット語訳による思想伝承の背景 - 翻訳と教育 -
3. 学会等名 国際東方学会議
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoshimizu, Chizuko
2. 発表標題 Later Madhyamikas on logic implicit in MMK 1.3 or the negation of the arising from other
3. 学会等名 International Workshop: Candrakirti and beyond.
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoshimizu, Chizuko
2. 発表標題 Indian and Tibetan Madhyamikas on Mulamadhyamakakarika 1.3 or the negation of arising from other
3. 学会等名 The Tsukuba-Hamburg Universities Symposium Series: Buddhist Studies Young Scholars' Workshop 2018
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 斎藤明
2. 発表標題 仏典翻訳の今昔(いまむかし) 漢訳とチベット語訳をめぐって
3. 学会等名 国際東方学会議
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 斎藤明
2. 発表標題 『宝性論』のtathagatagarbha解釈考
3. 学会等名 日本印度学仏教学会
4. 発表年 2017年

1 . 発表者名 Saito, Akira
2 . 発表標題 Bhaviveka vs. Candrakirti on the Logic of MMK 1.1: Negation of Arising in the Four Possible Ways
3 . 学会等名 The 2nd International Symposium on Hetuvidya
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 Saito, Akira
2 . 発表標題 Buddha-Nature or Buddha Within?: Revisiting the Meaning of tathagata-garbha
3 . 学会等名 18th Congress of International Association of Buddhist Studies
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 Saito, Akira
2 . 発表標題 Bhaviveka ' s Concept of Prajna in the Context of the Two Truths
3 . 学会等名 北京大学哲学研究室 (招待講演)
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 Saito, Akira
2 . 発表標題 Facts or Fakes?: Reconsidering Santideva ' s Names, Life, and Works
3 . 学会等名 Australian Association of Buddhist Studies (ASBS), Lecture Series (招待講演)
4 . 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 YOSHIMIZU Chizuko, NEMOTO Hiroshi, KANO Kazuo	4. 発行年 2018年
2. 出版社 The Toyo Bunko	5. 総ページ数 xxviii+87p.
3. 書名 Zhang Thang sag pa ' Byung gnas ye shes, dBu ma tshig gsal gyi ti ka, Part II, Studies in Tibetan Religious and Historical Texts, vol.2	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----